

新成人 誓いのこぼれ

本日は、成人を迎えた私たちの門出に際し、このように盛大な式典を開催していただき、誠にありがとうございます。また、さきほどは、町長様をはじめ、来賓のみなさま方から温かいお言葉をいただき、新成人一同、心よりお礼申し上げます。

そして、このたび人生の節目である成人式をこの八百津町でも成長してきた仲間たちと迎えることができ、とてもうれしく思います。

さて、長いようであつという間の20年、誰もが平坦な道のみではなく、いくつもの困難を乗り越えて今日の自分があるのではないのでしょうか。

幼い頃の私は、病気がちで、何も取り柄もなく、人に誇れる物もなく、みんなと容姿が違うことで、誰かに責められたわけでもないのに、自分で自分を責めてばかりでした。ひとりぼっちになりたくなかった。みんなが求める私を演じる。思春期に初めて覚えた自分を偽ることで自分を守る方法でした。そんな悩みつきながらの日々でしたが、自分を見いだし輝ける

未来を夢見ている自分もいました。さらにこの八百津町でたくさんの優しさに出会えた私は、人生ひとりぼっちではないことに気づいていきます。両親や友人や恩師や地域の人たちからたくさんの愛情と優しさをいただいたからこそ、今日の私がここにあるのだと思っています。

振り返れば、楽しかった思い出がいっぱい頭の中に浮かんできます。野球を通して友人に出会い同じチームでプレイしたこと。休み時間に仲間になつたことを思い出しながら走り回っていたこと。漫画やドラマの今後の展開など何気ない話で盛り上がったこと。修学旅行で夜更かししたりハメを外したこと。運動会で母の作ってくれたお弁当を食べ、両親の前だからと張り切ってみるもの、いつものように空回りしたこと。学校帰り、日の暮れるまで道ばたでたわいもない話をしていたこと。他にもたくさん思い出があります。だから、今いえることは、両親や友人のおかげでこの20年、間違いなく色鮮やかな人生だったということです。

しかしそんな大切なことも忘れそうになり、不安でいっぱいになることもあります。私のこの2つの目で目先のことだけしか見ようとしなければならぬ、この2つの耳で周りの雑音しか聞こうとしないなら、さらにそんな気持ちが強くなってしまうでしょう。

自分には両親もいて、帰る家があつて、当たり前前の生活が、呼吸するぐらい当たり前にある訳ですが、それは自分にとってすごく幸せであることをこの文章を考えながら気づきました。

だから小さなことでつまづいて立ち止まるのではなく、まず、自分が置かれている環境を幸せだと思える人になりたい。これからは両親が産んでくれたこの体、何一つ無駄にすることなく、この目での痛みを感じ、この手で人を支え、この声で自分を主張し、この足で向かいたい未来に歩んでいく。人の痛みを寄り添い守れる強さ、人を信じ許すことのできるというある意味での弱さ、誰よりも強く誰よりも弱い、そんな器の大きい大人になつていくことを、今私はここで誓います。

そして最後に、私は私の夢を追いかけていきます。みんなはみんなの夢を追いかけてください。

このことは一見してバラバラのようにも思えますが、その行為や思い自体が私たちの絆であると思います。いつもは素直になれず照れくさくていえないけれど、今日ぐらいはかっこつけます。

「一人一人にとって幸せな人生を歩みましょう」



平成30年1月7日
八百津町 新成人代表

長瀬 立樹(塩口)